

エルンスト・ブロッホ『希望の原理』白水iクラシックス版 —— そのこんにちにおける意義 ——

梅原宏司

UMEHARA Koji

1. はじめに

エルンスト・ブロッホ（1885-1977）は、きわめて独特なマルクス主義哲学者として知られている。その中でも1959年に刊行された『希望の原理』（*Das Prinzip Hoffnung*）は、主著と目されている。この書は、ブロッホ哲学の中心的なキーワードである「希望」について、その概念的検討から、具体的なあらわれ方までを膨大かつ詳細に考察したものである。日本でも、1970年代に翻訳が試みられ、1982年に白水社から全3巻で翻訳が完成した。

しかし、『希望の原理』は2012年11月から白水社から〈白水iクラシックス〉として全6巻で再版され、2013年4月に完結した。この文章では、この再版の現代的な意義について、白水iクラシックス版（以後「i版」と表記する）に新たに付された2つの解説を読み解き、さらに筆者の考察を加えることによって、2010年代のこんにちにおける『希望の原理』の意義について考えてみたい。

評者は、この再版の現代的な意味について、次のように考えている。すなわち、こんにちのさまざまな文化表象について、現実の変革を目指す「ユートピア的衝動」という立場から、新しい分析が可能なのではないかということである。とくに評者が考えているのは、現代日本のナショナリズムの問題である。しかし評者の議論を展開する前に、まずは新しい解説の意味を考えてみることにしたい。

新しい解説とは、柄谷行人による第1巻の「二重の転倒、二重の回帰」と、宇野重規による第3巻の「希望が語られる時代」である¹。柄谷の解説は、フロイトの、過去に失われた・抑圧されたものの「回帰」という視点からブロッホを読み解こうとするものである。宇野の解説は、それに対して人間が「未来に規定されている」という視点からブロッホの現代的意味を考えようとするものである。

2. 柄谷行人の解説——ブロッホとフロイト

まず柄谷の解説から見よう。柄谷は冒頭で「私がエルンスト・ブロッホあるいは『未来の哲学』について考えるようになったのは、一九九〇年代、つまり、ソ連崩壊以後である」(柄谷 2012: 387)と書き出している。これは、マルクス主義が「未来を先取りすることによって人を強制する権力、具体的にいえば、ソ連のような社会主義国家に帰結しただけであった」(柄谷 2012: 387)からである。しかし、先進国でマルクス主義を「大きな物語」と名づけるポストモダンニズムが流行し、イスラム圏で宗教的な革命運動が興隆してきた1990年代以降、柄谷は「積極的な変革の展望が必要だと考えるようになった」(柄谷 2012: 388)。そして、柄谷は以下のように続ける。

以来、私はブロッホに関心をもちはじめた。なぜブロッホは、他のマルクス主義者と違って、「未来」について考えたのか、さらに宗教やロマン主義的な先祖返りというような諸問題について考えたのか。(柄谷 2012: 388)

すなわち、柄谷はブロッホを「未来」や「宗教」「ロマン主義」について思考した人物と考えているのである。では、ブロッホにおける「未来」とは、柄谷にとってどのようなものであっただろうか。それは「まだ生起していないものを事前において見る」(柄谷 2012: 390)ことであった。柄谷はその具体的な様相を、ブロッホの宗教の扱い方に見出す。

彼は、通常の唯物論者のように、宗教を斥けたりしない。逆に、宗教の中に、共産主義あるいは「希望」の開示を見いだす。もちろん、すべての宗教にではなく、私の言い方でいえば、普遍宗教に、である。たとえば、『希望の原理』では、ブロッホはキリスト教だけでなく、孔子や老子その他にいたるまで考察を広げている。(柄谷 2012: 390)

すなわち、普通の唯物論者・マルクス主義者が斥ける「(普遍)宗教」の中に、ブロッホは現実を未来において変革することを望む「希望」の開示を見だし、それを分析しているのである(i版では第6巻第53章に収録されている

部分である)。

そして、柄谷はマルクスの「過去」と「未来」の差異に言及し、それをブロッホがどのように受け継いだかを、以下のように考察している。柄谷によれば、マルクスは未来の共産主義を、原始的共産主義(国家以前の氏族社会)を「高次元で回復する」ことを目指していた(柄谷 2012: 391)。この場合「高次元」というものは、過去のものを一度否定することによってのみ実現される。そのままでの回復を試みれば、それはロマン主義的、あるいはナショナリズム的な復古にしかならない。

ブロッホは、こうした復古的ロマン主義とマルクス主義の違いにきわめて敏感であった。柄谷によれば、ブロッホはロマン主義を「忘却されたもの」として考え、それによってマルクスの「過去のもの」の問題を引き継いだと考えるのである。しかし、そこで重要なのは、ブロッホがフロイトをロマン主義の枠内に入れてしまったことである。ブロッホは、フロイトが「無意識」をロマン主義においてあらわれる先祖返りと類似するものであると考えた。しかし、柄谷はこのブロッホのフロイトのとらえ方に異をとる。

ブロッホは、フロイトの「無意識」概念に対して、「未だ-意識されないもの」(das Noch-Nicht-Bewußte)という概念を立てた。この見方は、フロイトがいう「抑圧されたものの回帰」を、過去のノスタルジックな回帰と見なすことである。しかし、「抑圧されたものの回帰」は、そのようなものではない。フロイトは、抑圧されたものが回帰する場合、人の意思に対して強迫的なかたちであられる、という。(柄谷 2012: 391-2)

すなわち、柄谷はブロッホが「抑圧されたものの回帰」の意味をとらえきれなかったというのである。ここから柄谷は、「今は失われてしまったものの回帰」と、「抑圧されてしまったものの回帰」を一応区別する。前者は単純な過去の継続であり「低次元での回復」であるが、後者は強迫的ないし高次元での回復として表れるのである。ただ柄谷自身もいうとおり、この2つを厳密に区別することは難しい。「たとえば“低次元での回復”にも“高次元での回復”の可能性がふくまれることがあり、その逆もありうる」(柄谷 2012: 392)。この回復の読解を試みたのが、柄谷によれば『希望の原理』の文学、神話、哲学、宗教、科学を包括した膨大な考察なのである。

ただし、柄谷は、「宗教」あるいは「希望」というものを、いわゆる上部構造においてだけ考察するやり方に満足できなかった。そこで、彼は「経済」的な「交換様式」の概念を提唱する（これが『世界史の構造』）に結実したと柄谷はいう）。

柄谷の解説は、ブロッホがフロイトを誤読していること、「交換様式」の概念を見落としていることを欠点としつつも、「ユートピア的な思考の集大成として、つまり、容易にくみ尽くせない豊かな素材を提供する貴重な労作として、新たにたちあられる」（柄谷 2012: 393）と結ばれている。はたしてブロッホが本当にフロイトを誤読していたか、また「交換様式」の概念を見落としていたのかは微妙なところであるが、ひとつの問題提起としてはうなずけるところである²。

3. 宇野重規の解説——ブロッホとオバマ

続いて宇野重規である。宇野は、現アメリカ大統領のバラク・オバマとブロッホを並列する。オバマは、2004年のアメリカ民主党大会基調演説で「安易な楽観主義」でない「希望」を取り上げ、2008年の大統領選でもそれを引き継ぐ。そこでは「大胆不敵な希望（The Audacity of Hope）」³（宇野 2013: 426）がタイトルとなった。それは政治の中では以下のようにあられ、ブロッホの発想と共通するという。

政治の一つの役割は、「私たちの中にある」（オバマ）、すなわち、私たちがすでに潜在的に望んでいるものを、言葉を通じて目に見えるように表現し、そのことによって一人ひとりの「よりよいもの」への変革の「希望」を、社会全体の変革へと結びつけていくことにある。その意味で、政治には希望が不可欠である。

このようなオバマによって思い起こされた希望とは、ブロッホのいう希望と、どこか通じるものがあるのかもしれない。ブロッホのいう「未だ-ない（Noch-Nicht）」もまた、歴史のいま、この時間に潜在する、隠された力に注目するものである。

真に前に向かうとは、単に未来に何らかの抽象的な理想を投影することではない。そうではなく、「未だ-意識されていない」が、現在のなかにし

っかりと存在する歴史的な力を自覚し、その力を志向することである。(中略) あえて宗教を正面から論じるブロッホは、キリスト教のみならず、仏教や儒教にまで言及する。さながら希望をめぐる言説の百貨店かのごとき様相を呈する本書のなかで、ブロッホが問題にするのは、「これが目指すべきユートピアだ」というのではなく、「人がおよそ未来によって規定されているとは、どういうことか」という問題である。(宇野 2013: 427)

宇野はここで「人がおよそ未来によって規定されている」あるいは「未だ-ない」ということを、オバマとブロッホの共通点として挙げているのである。そもそもオバマとブロッホという並列が許されるのかということについては問題がある⁴。しかし、ブロッホにおける「未来」の可能性をそれなりにとらえたものと考えられる。宇野の議論は、柄谷ほど原理的でないものの、「未だ-ない」の意味を現代において考えることの意味について考えた点で、柄谷との共通点も見いだせる。

4. ブロッホの「疎外のない世界」としての「文化」概念

さて、ここまで柄谷行人と宇野重規の議論を紹介してきた。二人は、ブロッホのキータームとも称される「未だ-ない (Noch-Nicht)」「未だ-意識されないもの (das Noch-Nicht-Bewußte)」に言及しながら、2010年代におけるブロッホの意義について触れてきている。二人の考察は、1990年代以降の世界で、資本主義の変革が不可能と思われてきた時代にあり、いかに「変革への希望」を考えるかという意味を持つと思われる。

しかし、これから筆者が考えたいのは、柄谷や宇野が言及していないブロッホの側面である。それは「文化」をどのようにとらえるかということである。

ブロッホは、「文化」について、第2部「(基礎づけ)先取りする意識」(1版では第1巻所収)の中で次のような定義を下している。

ある時代の支配的な思想としてのイデオロギーは、マルクスの的確な命題によれば、支配階級の思想である。しかしまた、この階級も自己疎外された階級なので、自分の階級の繁栄を人類一般の繁栄にすりかえる打算のほか、疎外のない世界という、ノスタルジアと追い越しの観念が、イデ

オロギーのなかに入り込んだのである。この観念は、とりわけ市民社会においては、文化と呼ばれている。それはまた、ふだん疎外のなかで安閑としている階級にも、ユートピア的な機能が部分的に働いていることを示している。(Bloch 1959=2012: 242-3)

この文章は、二つのことを示してくれている。第一に、ブロッホは「イデオロギー」を、たんなる「虚偽意識」としてだけでなく、「ユートピア」としてとらえているということである。第二に、ブロッホはイデオロギーの必須条件として「疎外のない世界」という要素をとらえているということである。

アメリカのマルクス主義批評家であるフレドリック・ジェイムソン(1934-)は、その主著と目される『政治的無意識』(*The Political Unconscious*)において、この「イデオロギー」と「ユートピア」の関係を、次のようにパラフレーズしている。

むしろ私たちが考えるべきは、弁証法的思考が、いまだ存在せざる集団性を予期するものであるということなのだ。この意味で、まずイデオロギー的なものを、同時にユートピア的なものと捉え、返す刀でユートピア的なものを同時にイデオロギー的なものと捉えるようにしなければならない。いいかえるなら、集団の弁証法が唯一思考可能な解答となるような問いをたてることが先決なのである。(Jameson 1981=2010: 525)

ここでいわれている「いまだ存在せざる集団性」とは、現在の資本主義体制(それはたえず共同体・共同性を破壊していくものである)に対するものである。それは、ブロッホがいう「疎外のない世界という、ノスタルジアと追い越しの観念」(Bloch 1959=2012: 242-3)と同じものであり、疎外のない集団性である。またこの集団性は、柄谷行人がいうロマン主義が試みる原始的集団性のそのままの復古、あるいはマルクス主義が試みる「高次元」で原始的共産主義を回復する試みの両方をふくむものといえる。

こうした「ユートピアとイデオロギーの弁証法」(これは『政治的無意識』の最終章の題名である)を枠組みとして用いることによって、ジェイムソンはブロッホの「ユートピア」概念を、メディア研究や文化研究(カルチュラル・スタディーズ)に用いることができると考える。たとえば、「とびきり低俗なも

の、たとえば広告のスローガン——外見だけ華やかな生活のヴィジョンとか、肉体の変身についてのヴィジョンとか、およそ信じがたい性的充足感についてのヴィジョンなど」(Jameson 1981=2010: 527) は、普通の見方ではイデオロギーの浅薄な表れとしてしかみることができないが、ユートピア的衝動による現実変革の試みのあらわれとしてもとらえることで、より深い分析が可能になるというのである⁵。

事実、ブロッホ自身が、『希望の原理』のなかでこうした大衆文化テキスト分析を行っている。それは全編にわたるが、とくに注目すべきは第3部「(移行)鏡のなかの願望像(陳列品, 童話, 旅, 映画, 舞台)」である⁶。そこでは広告や歳の市の見世物, 観光産業などから, クー・クラックス・クランや犯罪者の脅迫状, スリラー小説などにみられる残酷な願望像にまで分析が及んでいる。このようなブロッホの分析手法は、彼のそれまでの著作『未知への痕跡』, 『この時代の遺産』, 『ナチズム』などにおいて発揮された手法である。これらの著作や『希望の原理』では、ナチズムをはじめとする反ユダヤ主義の願望像が、どのように「ユダヤ人」「黒人」などの他者のいない「疎外のない世界」というユートピア願望に依拠しているかについて見事に論じているのである。

5. 文化批評・文化研究理論としてのブロッホの可能性

このようなブロッホの「文化」概念の可能性は、じつはこれまで日本でも数多く紹介されてきたものの、実際には応用されることが少なかった。ここでは、これまでの日本におけるナショナリズムに関する議論を念頭に置きながら、ブロッホの可能性について考えてみよう。それは、日本のナショナリズムを「疎外のない世界」という、ノスタルジアと追い越しの観念あるいは「ユートピアとイデオロギーの弁証法」の立場から研究するということである。

これをいいかえれば、現代日本のナショナリズムを、他者を排除した現状変革の試みとして考え、その目指すところの「未来」を考えるということである。たとえばナショナリズムを奉じる者が「在日」「韓国」「中国」などの他者のいない世界を夢みる際の「満足感」、あるいは「ノスタルジアと追い越しの観念」の質などを、より問題化し解明できるのではないだろうか。

そして、ブロッホをこのように文化批評・文化研究理論として扱う立場に、柄谷が考察する「現実変革としての宗教」や過去のものの回帰、宇野の「人が

およそ未来によって規定されている」という考察をくわえてみると、また新しい視角が開けてくるのではないかと考えられる。これは、「日本」という記号に執着するナショナリズムを、未来において「集団性」を回復する試みとしてとらえることである。いいかえれば、「日本」という記号がどのような「集団性」を担っているか、その中にはどのような理想的な「集団的な過去」が充填され、未来においてどのように回復することが望まれているかということ进行分析することである。

現代日本ではナショナリズム的な言説が支配的となっているのは周知のところである。しかし、そうした言説の中にあるユートピア的衝動（あるいは満足感、現実変革の衝動）を分析し、さらにそれを生む社会的状況について考察することによって、現代日本の文化・社会的状況、さらにはグローバリゼーションの中における日本の位置などを、より深く考えていくことができるのではないだろうか。

筆者は、2010年代における『希望の原理』復刊の意義を、以上のように考えている。

注

- ¹ なお、『希望の原理』自体の解説については、i版第2巻の「解題」（保坂一夫）、第6巻「あとがきにかえて——『希望の原理』の成立」（山下肇）がくわしい。また、第6巻の「新版刊行に際して」（石丸昭二）は、1982年に刊行された際の書評がまとめられている。
- ² ちなみに、ラカン派マルクス主義哲学者として知られるスラヴォイ・ジジエクは、ピーター・トンブソンとの共編で*The Privatization of Hope: Ernst Bloch and the Future of Utopia*という新著を準備している（2013年12月、Duke University Pressより刊行予定。精神分析的解釈を論じるシリーズ[sic]のうちの一巻である）。ジジエクたちがプロットホについてどのような考察を行うのか、とくに彼・彼女たちの精神分析的解釈がどのようにプロットホ読解に生かされるのか、興味深いところである。「プロットホとフロイト」の問題は、これらの刊行も合わせて、また考察の対象にしたいと考えているが、今回は柄谷の読解に基づく問題提起でとどめておきたい。
- ³ 宇野によれば「（現在の状況において）希望を語る大胆不敵さ」というニュアンスがこめられている。
- ⁴ 確実にいえることは、オバマ自身は資本主義自体を変革の対象にしていないことであり、これは資本主義の革命を目指すプロットホとは大きな違いである。ただし、なんらかの変革を夢見てオバマに投票したアメリカの有権者、あるいはウォールストリート・

オキュパイ参加者のうちで「オバマよ、目を覚ませ！」と叫んだ人々の「希望」に関する意識を考える上では、このような問題設定は有効かもしれない。

⁵ ちなみに、ジェイムソンもブロッホの手法に倣った文化批評を数多く行っている。たとえば『政治的無意識』、『未来の考古学』（作品社から第1部と第2部に分けて翻訳刊行）などである。また、ジェイムソンの著作も、2010年代に入ってから急速に日本語への翻訳が進んでいる。この現象も興味深い。筆者はブロッホとジェイムソンが共有する「ユートピア」という問題意識が日本でも次第に共有されはじめていることのアラわれではないかと考えている。

⁶ i版では第2巻に収録されている。

参考文献

- Bloch, Ernst, 1959, *Das Prinzip Hoffnung*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (=2012-3, 山下肇・瀬戸鞏吉・片岡啓治・沼崎雅行・石丸昭二・保坂一夫訳『希望の原理 第1-6巻』白水社.)
- Jameson, Fredric, 1984, *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*, N.Y.: Cornell University Press. (=2010, 大橋洋一・木村茂雄・太田耕人訳『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』平凡社.)
- 柄谷行人, 2012, 「解説 二重の転倒, 二重の回帰」, エルンスト, ブロッホ, 山下肇・瀬戸鞏吉・片岡啓治・沼崎雅行・石丸昭二・保坂一夫訳, 『希望の原理 第1巻』白水社, 385-93. [Bloch, Ernst, *Das Prinzip Hoffnung*, 1959.]
- 宇野重規, 2013, 「解説 希望が語られる時代」, エルンスト, ブロッホ, 山下肇・瀬戸鞏吉・片岡啓治・沼崎雅行・石丸昭二・保坂一夫訳『希望の原理 第3巻』白水社, 423-29. [Bloch, Ernst, *Das Prinzip Hoffnung*, 1959.]